

穂上 崇・桜井 明・平野 宏・
鈴木浩之・原田信比古*

〔症例〕59歳男性。〔主訴〕心窩部痛、悪心、嘔吐。〔現病歴〕1999年11月10日より主訴が出現した。15日東京女子医大病院外来で胆石の頸部嵌頓と診断され、当院に緊急入院となった。PTGBDを施行し、胆嚢頸部に結石、総胆管末端に径約10mm大の嚢腫様病変が認められた。胆管や嚢腫内に結石や腫瘍性病変は認められず、胆嚢内胆汁中アマラーゼ、血清CA19-9の上昇はみられず、胆嚢摘出術のみ施行した。術後ERPで膵管と嚢腫との交通はみられなかった。内視鏡検査では乳頭の緊満状態から平低化までの経時的変化も観察可能であった興味あるcholedochoceの1例を経験したので若干の文献的考察を加え報告した。

肝内外結石に対するヘキサメタリン酸ナトリウムの有効性について

(済生会栗橋病院内科, *同薬剤部, **東京女子医大消化器病センター)

春山航一・福屋裕嗣・新浪千加子・
梁 京賢・片山 修・嶋村正典*・
片山 晃*・土岐文武**

以前ビリルビンカルシウム石の溶解剤としてヘキサメタリン酸ナトリウムが使われていたが、内視鏡的採石術の進歩により使用されない。今回、内視鏡的採石術が困難な症例に本剤を併用し、有効性を経験したので報告する。

〔方法〕ヘキサメタリン酸ナトリウム50gに注射用水900mlを加え作製し、ENBD tubeより1日2回100ml/4hで投与した。

〔症例〕胆管炎で入院し、肝内外胆管に結石が充満していたが、傍乳頭憩室のため乳頭の正面視が難しく、碎石バスケット挿入が困難なため、初回はEPBD、ENBD tube留置のみとなった。本剤を10日間投与し、その間採石術を2回施行し、ほぼ結石を除去し胆管炎は改善した。

〔まとめ〕内視鏡的採石術にヘキサメタリン酸ナトリウムを併用することで、①採石回数が軽減した、②碎石バスケットを使用せず治療できた、③肝内結石に対する有用性が示唆された、④明らかな副作用を認めなかった。

悪性疾患に伴う胆道閉塞に対する Expandable Metallic Stent の使用経験

(福田記念病院内科, *同外科)

橋本 敬・柳澤伸嘉・伊藤譲治・

山口典久・菅谷洋子・和久茂仁・
小原靖尋*・福田武準*

1998年8月より1999年11月までに6例の悪性疾患に伴う閉塞性黄疸の手術不能例に対し、経皮的胆道ドレナージ術後にexpandable metallic stentの留置を行った。6例の平均年齢は74.8歳、男女比2:4、その内訳は胆管癌3例、膵臓癌2例、胆嚢癌術後再発1例であった。全例stent留置後退院しており、術後平均生存期間は223.8日で、再閉塞を起こしたのは6例中1例、平均開存期間は170.4日であった。6例中3例の死亡例があるが、同例は死亡時stentの閉塞は認めなかった。手術不能な閉塞性黄疸に対する経皮的胆道ドレナージ術後のexpandable metallic stentによる内瘻化は患者のQOLの向上に有用であると思われる。

進行膵臓癌に対する動注併用放射線治療

(東京慈恵会医大放射線医学講座)

中川昌之・兼平千裕・小林雅夫・
本田 力・関根 広・福田国彦

1978~99年の間、111例の膵臓癌に対する放射線治療が行われ、IORT、温熱療法、術前照射など工夫もされていたが長期生存は困難であった。そこで最近、動注化療併用で照射を行い、その効果とQOLをみた。施行例は7例で、化療併用は局所濃度を高める目的で動注とした。治療後の評価は画像上、PR2例、NC4例、PD1例であり、腫瘍マーカーは高値を示した4例で半減以上低下した。QOLは外泊や外来治療の妨げにはならず、また症状改善しPS向上は4例にあった。なおPRの1例は、照射後のdown stageが得られ切除可能となった。今後、本法の適応、本法施行後の成績と切除可能性等を検討したいと考えている。

悪性膵島腫瘍の1症例

(谷津保健病院外科)

鬼澤俊輔・宮崎正二郎・藤田 徹・
森山 宣・小暮晃子・平山芳文・
糟谷 忍・御子柴幸男

症例は73歳女性で、1999年9月他医健診の腹部超音波検査で膵体部に4cmの腫瘤を認め、精査加療目的で紹介された。血液検査ではグルカゴン値が201pg/mlと軽度上昇を認めた。腫瘍マーカー他の異常は認めなかった。USでは膵体部にhypoechoic massを認めた。CTでは造影早期相で比較的均一に染まり、周囲は被膜様に濃染され、晩期相まで淡く造影される腫瘍を認めた。Angioでは、血管新生像、淡い腫瘍濃染像と脾静脈の圧排を認めた。ERCPでは、体尾部の主膵管の途